

## 1. はじめに

従来、日本の大学は学術研究や教育活動などにのみ専心し、地域に大きな意味や必要性を認めないことが多かった。しかし、昨今では大学が培ってきた知識・経験を応用して地域と連携・協力を図り、地域の育成、活性化に貢献する等、大学には社会的責任を果たすことが求められている。こうした考えに基づき、浜松学院大学では平成 21 年に大学の知的資源を活用し、地域の課題に取り組むことを目的とした「地域共創センター」を開設した。そこで、地域共創センターの活動の一環として、平成 21 年度文部科学省委託事業「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」に着手することになった。

本報告書は、二章から構成されている。第一章では、文部科学省委託事業「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」の委託を受け、地域共創センターに「浜松学院大学放課後子どもプラン推進委員会」を設置して実施した教室について報告する。第二章では、市民団体の「定住外国人子弟等支援推進協議会」が同事業の委託を受けて実施した「特別支援を有する子どものための生活環境適応支援事業」について報告する。

## 2. 浜松学院大学放課後子どもプラン推進委員会

### a. 不就学に陥った子どもの支援 地域の支援ネットワークの活用

浜松学院大学 津村公博

## I.平成 20 年度文部科学省 放課後活動支援モデル事業

### 1.背景

平成 20 年末の米国発の金融危機を発端とする未曾有の経済不況によって、労働階層の底辺に固定されている外国人の派遣労働者は、早い段階で解雇の対象となった。長期に渡る親の失業は家庭に貧困をもたらし、それが子どもたちの家庭・学校における生活に大きな影響を与えている。義務教育が相当しないと見なされている外国人の子どもの場合には、生活が困窮すれば学齢期にあっても教育の機会を失うことも少なくない。

このような状況において、浜松学院大学は緊急的に外国人が集住する地域に不就学に陥った子どものための学びの場創出を目的とする調査研究の委託を受けることになった<sup>1</sup>。とりわけ、外国人が集住する静岡西部地域には外国人との共生社会の推進に力が注がれており、多文化教育の分野の人材・知識が集積している。本調査研究では、外国人学校を退学した子どもたちに学びの場を提供するために、カトリック浜松教会が持つ社会的ネットワークを活用した。

### 2.平成 20 年度放課後活動支援モデル事業から見えてきたもの

#### (1)エスニック・コミュニティが持つ社会的ネットワークの活用

公立学校に在籍している外国人の子どもの対象とする日本語・学習支援活動は、各地で地域住民や日本語ボランティア団体などが主体となって行われている。しかし、地域住民が外国人学校の子どもの特定することは困難であった。経済不況のあおりから多くの外国人の子どもの不就学に陥っても、効果的な措置を講じられずにきたのである。

平成 20 年度放課後活動支援モデル事業においては、カトリック浜松教会の社会的ネットワークを活用して不就学の子どもの見つけ出し、緊急的な学びの場を作り出した。そして外国人に関わる様々な問題は、日本人主体の支援だけでは解決につながらず、当事者である外国人あるいはエスニック・コミュニティ自らが主体的に関与しなければ本質的な問題解決にならないことを示した。

#### (2)地域の知的資源としての大学の役割

浜松学院大学が平成 20 年末の経済不況以降における浜松市内の外国人学校在籍者数を調査した結果多くの子どもが退学した事実を確認したが、公立小中学校には転入していなかった<sup>2</sup>。そのため、本学が持つ多文化教育や日本語教育資源とエスニック・コミュニティが保有する社会的ネットワークを有機的に活用し、短期間（5 週間）ではあるものの、不就学の子どもの対して学びの機会と場を提供した<sup>3</sup>。

<sup>1</sup>平成 20 年度放課後活動支援モデル事業「コミュニティ・キッズ教室」

<sup>2</sup>浜松市教育相談支援センターによると、平成 20 年 11 月～平成 21 年 3 月 27 日に外国人学校の退学者で公立学校への入学手続きをした者は 55 人である。平成 21 年 3 月末現在の浜松市内 6 校の外国人学校の退学者は、270 人から 300 人程度いると思われる（津村による訪問聞き取り調査、平成 21 年 3 月 25 日）。

<sup>3</sup>詳細は平成 20 年度文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究」委託研究報告書、「HGU アウトリーチ コミュニティ・キッズ教室 不就学に陥った外国人の子どもへの緊急措置」を参照されたい。

## II.平成 21 年度「総合的な放課後対策推進のための調査研究」の概要

### 1.目的

平成 20 年度に行った「総合的な放課後対策推進のための調査研究」では、経済不況により外国人学校を退学し（あるいは退学のリスクのある）学習の連続性が脅かされている子どもに対して、緊急的に地域の大学と地域のエスニック・コミュニティが連携・協力して新たな学習の機会や場を創出したことの意義と方法について報告した。

平成 21 年度「総合的な放課後対策推進のための調査研究」では、不就学の状態にある子どもの状態を検証するとともに、不就学の子どもへの対応について提案したい。

### 2.概要

(1)実施期間：平成 21 年 7 月 1 日～平成 22 年 1 月 29 日

(2)実施回数：全 60 回

(3)カリキュラム

a.浜松カトリック教会 コミュニティ・キッズ教室

対象：10～15 歳

場所：カトリック浜松教会（300 時間）

	日数	時間数	授業科目
1 学期	6 日	30 時間	午前：日本語、日本語、ポルトガル語 午後：算数、社会あるいは総合の時間
2 学期	44 日	220 時間	午前：日本語、日本語、ポルトガル語 午後：算数、社会あるいは総合の時間
3 学期	10 日	50 時間	午前：日本語、日本語、ポルトガル語 午後：算数、社会あるいは総合の時間

b.浜松学院大学 コミュニティ・キッズ教室

対象：6～9 歳

場所：浜松学院大学（180 時間）

	日数	時間数	授業科目
1 学期	6 日	18 時間	午前：日本語、ポルトガル語、算数
2 学期	44 日	132 時間	午前：日本語、ポルトガル語、算数
3 学期	10 日	30 時間	午前：日本語、ポルトガル語、算数

### (4)運営体制

a.浜松学院大学

浜松学院大学に事業運営事務局を設置し、事業統括者の他、事務担当、経理担当を置いた。研究者には第二言語習得論、日本語教育、多文化教育、教育学の専門家を配置した。

b.カトリック浜松教会

・事業担当者

教会にはブラジル人、ペルー人、フィリピン人、韓国人などのエスニック・コミュニティが形成されている。そこで、各コミュニティの意見や考えの調整役として事業担当者を置いた<sup>4</sup>。

・教務関係コーディネーター

数学・ポルトガル語に関するカリキュラムの運営を担当した。また、精神衛生の知識があり、衝動

<sup>4</sup>それぞれの外国人コミュニティは独自の運営組織を持っているため活動や経理を分けていたが、平成 21 年 2 月 13 日～3 月 25 日に実施した平成 20 年度事業を通して、カトリック浜松教会内の外国人コミュニティがまとまり、それぞれの各運営委員会を解散して経理を一元化させたことで組織強化につながった。

性、攻撃性のある子どもなど情緒が不安定な子どもには科目担当教師と相談して対応した。

・生活習慣等に関わる担当者

授業時のみならず送迎時、授業時間、休み時間、昼食時に集団行動からの逸脱、乱暴・反抗的な言動を繰り返す子どもが多い。

## (5)運営体制

### a.送迎

外国人の子どものために学びの場を構築する場合、送迎の有無が参加人数の多寡に大きく影響する。経済不況を受けて不就学に陥ったのは、かつてブラジル人学校に在籍していた者が多数を占める<sup>5</sup>。外国人学校の学費は公立学校に支払う毎月の校納金に比べると5～10倍にも相当し、職を失ったり仕事が減ったりすれば学費を納めることは難しい。外国人学校には公立学校とは異なり特定の学区がないため、時には自治体を越えて通学する場合もある。外国人学校では送迎サービスにより生徒を集めているが、一度外国人学校を退学した子どもを再び呼び寄せるには、外国人学校同様に送迎の手段が必要となる。

### b.給食サービス

不就学の子どもを長時間に渡って受け入れる場合、給食を提供することが必要になる。無論、午前・午後のいずれかの時間帯に行えば不要であるが、親の働き方を考慮すれば短時間での受け入れは現実的とはいえないであろう。カトリック浜松教会事業担当者は、不就学の子どもを午前・午後に渡り受け入れる重要性を指摘して、「(日本語や教科指導の授業を)短時間用意しても子どもたちの生活を観察しなければ子どもたちが抱える様々な問題に気づくことは難しい」と述べた。

## (6)事業成果

### a.参加人数

第1回授業の参加者は55人いたが、最終回の第60回の授業には10人減となる45人が参加した。これは、事業実施期間中に親が日本で再就職を諦めたため親に連れられ帰国したり、公立学校・外国人学校への転入・復学を果たしたために本事業への参加を取りやめたものである。

### b.学校への転入

- ・公立中学校への転入：8人（うち、浜松市内公立小中学校への転入が4人）
- ・ブラジル人学校への復学：2人

### c.地域との交流

- ・浜松市内の中学校（静岡大学教育学部附属中学校）の生徒との相互交流
- ・浜松市内の私立高等学校（浜松海の星高等学校）の生徒との相互交流

### d.浜松市教育委員会教育相談支援センターとの連携・協力

- ・浜松市内の公立中学校への転入に伴う事前相談の実施

### e.浜松学院大学学生の参加（授業補助）

- ・浜松学院大学の大学生が授業補助として参加

---

<sup>5</sup>文部科学省は、経済不況後の平成20年末に南米系の外国人学校を対象として在籍する子どもの就学状況についての調査を実施したが、平成20年12月1日～平成21年2月2日の間にブラジル人学校の在籍者が34.9%、ペルー人学校の在籍者数が20.5%減少していると報告している。

・全 60 回の授業に延べ 72 人の大学生が参加

### Ⅲ.本年度調査から見えてきたもの

平成 21 年度の調査は、不就学に陥った子どもに対して緊急的な居場所を構築し、公立学校など教育現場へ戻すことを目的とした。したがって、子どもが公立学校で学習するために必要な条件を整える、つまり公立学校における学習レディネスを向上させることが必要である。ここでは、浜松学院大学で受け入れた 6~9 歳の子どもに着目し、公立学校で学習するために必要な条件として考えられる日本語能力と学習環境（生活の基盤・家庭環境）について述べたい。

#### 1.学習活動を支える日本語能力

緩利・二井が浜松学院大学の教室に参加していた 6~9 歳の子どもの日本語能力、ポルトガル語能力を調査した結果、家庭内での使用言語はポルトガル語であり、日本語・日本文化への接触機会が少ないため、日本語の習得率は低いと指摘している<sup>6</sup>。また、参加した全ての子ども(6~9 歳)のうち、小学校 1 年生で使われる指示語等を理解できるだけの日本語能力を有する者は 80%程度であると報告している。これは教科内容の理解の基礎となる日本語能力が備わっておらず、各教科の基礎学力の定着を図ることが困難であることを意味している。仮に公立小学校に転入しても、学校に今後留まるかどうかは未知数である。

#### 2.学習環境（生活の基盤・家庭環境）

本事業に参加した子どもには、授業内外で問題行動が目立った。筆者は浜松学院大学の大学生とともに日本語の授業に補助者として入り込んで参与観察を実施したが「大声を出して騒ぐなど集中力が全くない」、「気に入らないとすぐに物にあたる」、「席を離れて歩き回る」、「学習課題をしようとししない」、「子ども同士のトラブルが多い」、「隣の子どもの叩いたり、蹴ったりする」、「他の子どもを鉛筆で刺そうとする」等の問題行動が間断なく続くこともあった（授業観察記録より）。大学生に対しても攻撃的な行動が見られ、中には「子どもからの暴力に耐えられない」と離脱した者もいた。

このような行動は、家庭環境の変化に起因すると思われる。送出国と受入国の国際移動に加え、国内でも移動を繰り返すことは家族の分散化を招き、両親いずれかが不在の家庭で育つ子どもを生み出す。さらに、両親の就労時間が流動的なため親子で過ごす時間も少ない。子どもの問題行動の背景には、不安定な親子関係など家庭環境の問題があると考えられる。

### Ⅳ. 今後の支援

#### 1.学校の復帰や転入に必要なレディネスを向上させるプログラム

不就学に陥った子どもは、将来に対する不安と葛藤の中日本語や教科を学ぶ意欲を徐々に失っていく傾向にある。そのため、参加した子どもの中には不適應を起こしている子どもが多く見られた。

指導者には個々の子どもの不適應現象の把握と、原因の分析、対応が求められる。子どもたちの不安や緊張を軽減し、家庭の問題にも積極的な役割を果たせるよう臨床心理士の協力を得るといった配慮も必要であろう。

#### 2.家庭を重視した支援体制

カトリック浜松教会が不就学に陥った子どもを見つけ出し、教室へ参加させることができたのは、以前より南米日系人家庭への生活支援を行ってきたからである。経済不況以降、外国人家庭に対して食糧支給を行ったり、生活保護や生活福祉資金貸与の相談に応じたりする事が多くなり、家族内に不

<sup>6</sup>緩利誠、二井紀美子「不就学の子どもの実態調査」平成 21 年度文部科学省委託事業「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」

就学の子どもの存在を確認することになった。外国人家庭への支援をもとに築かれた信頼関係によって、子どもの教室への参加につながったのである。

現在、不就学に陥った子どもを抱える家庭は地域から孤立している場合が多い。本調査実施に際して、多くのエスニック・コミュニティのリーダーから聞き取り調査を行った。学校や教育委員会等に従事する南米日系人にも聞き取り調査を行ったが、中でも地域に根ざした福祉活動を展開している南米日系人の話は一際興味深いものがある。経済不況後に家庭崩壊した外国人の家族を目の当たりにしてきた彼の口からは、次のような話も聞くことができた。「失業の状態が長期化することにより、生活の不安やストレスから子どもを虐待する者もいる。薬に依存し、完全に育児放棄した親もいる」。このような家庭環境にある子どもに学ぶ機会と場を創出するには、子どものみならず家庭全体を支援する姿勢が必要である。

### 3.地域住民が主体となる支援体制の整備

前述の福祉委員が地域と関わりを持ったのは、子どもを公立学校に在籍させたことがきっかけであったという。PTAに参加したことから地域との接点ができ、それが自治会への参加とつながっていった。さらに、自治会からの推薦を受け、地区社会福祉協議会から福祉委員に委嘱されることになった。福祉委員就任後は、同じ地区の民生委員・児童委員と相談しながら生活が困窮している家族、母子家庭へ支援を行ってきた。その結果、家庭の支援活動を通して家庭内に不就学に陥った子どもを見つけることができるようになったのだという。彼は「福祉委員や民生委員に自分と同じブラジル人がいれば、地域全体で外国人の家庭や子どもを救える」と述べていた。

平成 21 年度放課後活動支援モデル事業でも、前年度同様にエスニック・コミュニティの持つ社会的ネットワークの必要性を再確認することができた。住宅や食糧の支援はエスニック・コミュニティのネットワークに支えられていると言っても過言ではない。今後もエスニック・コミュニティとの連携を維持しながら、地域住民主体の支援ネットワークを構築していく必要がある。家庭及び子どもの生活に関わる問題を福祉的な視点から支援するネットワークとして地区民生委員児童委員協議会がある。市町村の区域内で民生委員・児童委員・主任児童委員は、それぞれ地域福祉を担っている<sup>7</sup>。しかし、荻野（浜松市民生委員児童委員協議会会長）は、浜松市の民生委員・児童委員は、外国人の生活状況や支援の方策について研修が行われているものの、外国人家庭の困窮や不就学の問題に関して、必要性を認めながらも具体的な活動へは移していないと述べた<sup>8</sup>。また、地域によっては民生委員・児童委員・主任児童委員の高齢化や形骸化の指摘もあるが、外国人家庭の生活困窮や子どもの不就学の問題などに取り組むことで、かえって活性化する可能性もある<sup>9</sup>。

図(1)は、地域福祉のネットワークを示したものである。民生委員・児童委員・主任児童委員により構成される地区民生委員・児童委員協議会は、様々な生活上の問題を抱える家庭や子どもに支援活動を行っている。しかし、地区民生委員児童委員協議会のネットワークだけでは不十分である。地区民生委員児童委員協議会のネットワークを活用し、エスニック・コミュニティや外国人を支援する市民団体との連携・協力が不可欠である。さらに、労働行政機関や教育行政機関の専門職員を加えることで、保健・医療・人権・福祉・労働など包括的なサポートしていけるような体制を整えることがで

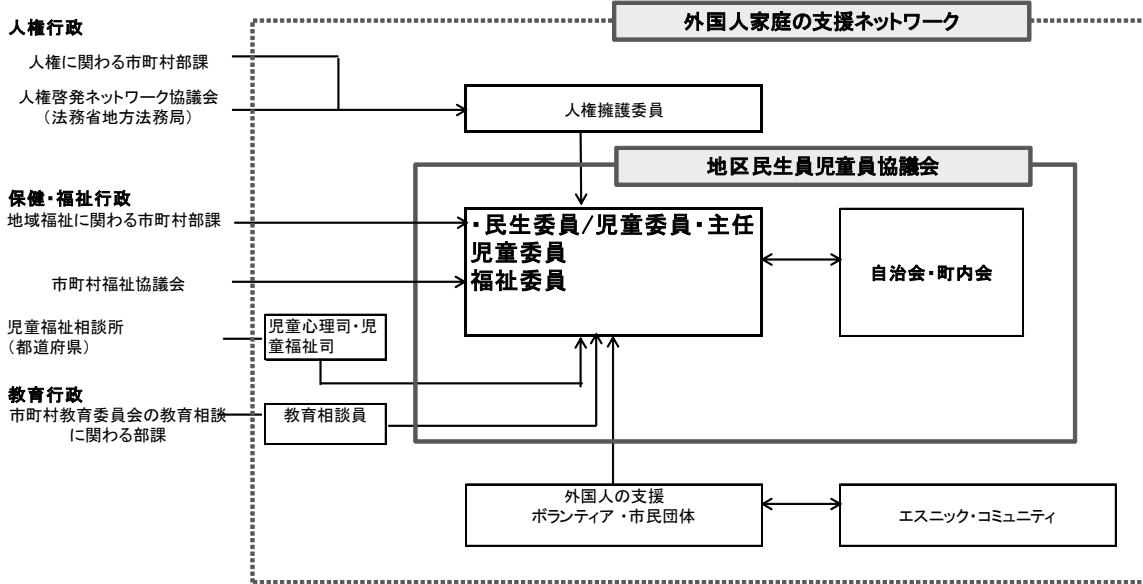
<sup>7</sup>民生委員は「民生委員法」、児童委員は「児童福祉法」によって定められているが、「児童福祉法」により児童委員が民生委員を兼ねることになっている。民生委員・児童委員は、自治会・町内会の役員から推薦されることが多い。主任児童委員は子どもを専門に担当する者で、児童福祉関係機関や公立小中学校などの教育機関、地域の児童健全育成に関する団体との連絡連携をとるなど調整役としての役割を担っている。なお、主任児童委員は民生委員・児童委員から選任される場合と、民生委員・児童委員とは別に委嘱される場合がある。

<sup>8</sup>筆者は、平成 22 年 4 月 16 日に荻野英子浜松市民生委員児童委員協議会会長（外国人が集住する葵・高丘地区民生委員児童委員児童委員協議会会長も兼任）及び大塚永由高丘地区民生委員児童委員児童委員協議会副会長から、外国人家庭への支援に関して聞き取り調査を実施した。彼らは、外国人の当事者グループや外国人支援グループと連携・協力しながら外国人家庭及びその子どもへの具体的な支援の枠組みを検討したいと回答していた。

<sup>9</sup>浜松市の民生委員・児童委員（1,176 人）の平均年齢は 65.2 歳である。

きる。

図(1)  
(行政セクター)



### 参考文献

浜松市地域総務課「民生委員・児童委員について」

文部科学省「ブラジル人学校の実態調査研究結果について」2009年

<http://www.nicer.go.jp/lom/data/contents/bgj/2009090201004.pdf>

### 【実践概要】

ここでは、日本語の授業担当者に行った聞き取りと記録（日報）から、実践の概要と課題について整理する。

#### 1. 月別進行

##### 7月

最初は、カタカナで自分の名前を書くことから始めた。掛け算や割り算はどの子どももできなかったため、日本語の時間でも算数の勉強をした。クラスは分けずに全員一緒に授業していた。宿題を出そうとしたが、自宅でやらせるのは難しいという教会関係者の意見もあり、断念した。

##### 8月

休み

##### 9月～10月

ひらがなの学習に入った。物の名前を歌にのせて覚えさせると、子どもたちの興味も高まり効果的であった。また数字の読み方も指導した。しかし、一人ずつ答えさせようとしても、全員が一斉に答えてしまう（黙って他の子どもが答えるのを待ってられない）など教室運営に問題があったので、10月からは年少・年長の2クラスに分けて授業を行うようにした。

##### 10月中・後半 ～1月末

年長のクラスは、書かせることに力をいれた。座席は自由にした。『絵で分かる漢字』を使用した。落ち着きのない子どももあり、授業運営に困難が生じたこともあった。また、中には自分から「宿題ちょうだい」と言ってくる子どももでてくるなど、子どもたちのやる気にも大きな差が生じた。

#### 2. 担当者の所感にみる課題

担当者によると、7月の教室開始前の予定では、小学校1年生になることを念頭に置いて、ひらがな・カタカナの習得と学校文化への適応を、学習目標とした。学校文化への適応とは、授業中座ってられるようにすることのほか、友人関係を築くために謝ったり「貸して」とお願いすることなどを想定していた。しかし、実際に教室が始まってみると、子どもたちの多くに勉強する気があまり見られず、おとなしく担当者の話を聞くこともなかったため、当初から教室運営は困難を極めた。また、ひらがな・カタカナの指導を予定していたが、子どもたちがカタカナの学習をひどく嫌がったため、ひらがなの確実な定着を図るためにも、ひらがなだけを指導する結果となった。学校文化への適応という点では、指示を最後まで聞いてもらえない時もあるなど、最後まで指導に苦慮し対応に困る面があった。日本語担当者らは、様々な自主教材を作成して、子どもたちの集中力や関心を引き出す努力をしていた。中には語彙の増加や文字の習得に意欲を見せる子どももいたものの、全体として、予定通りに授業進行することは難しく、学習の定着も十分には図れなかったといえるだろう。

不就学の子どもたちの場合、日本語を日常生活の中で使用することが少ないため、子どもたちの学習意欲が低いと、どれだけ授業をこなしても習得することが難しいと思われる。



コミュニティキッズ教室「日本語」学習内容		
日付	テーマ(全体・年長クラス)	テーマ(年少クラス)
1 2009/7/20	自分の名前の認知・数字の概念・家族	
2 2009/7/22	たくさんの中から自分の名前を探す 歌に合わせて物(文房具)の名前を覚える	
3 2009/7/24	「私は～です」「名前は何かですか?」…学生の名前を聞いて書く(学生には名前を言いながら、お手本を書いてもらう) 数字を覚える 文房具の名前(前回までの復習)	
4 2009/9/2	名前探し、数字(復習)	
5 2009/9/4	数字の復習(プリント:いくつあるかな/めがね・とけい・鍵たしざん)、プリントをファイルに閉じる	
6 2009/9/7	物の名前の復習(歌にのせて) ひらがなの導入(し・い・う・く・こ)	
7 2009/9/9	前回の復習「バナナ」「キウイ」「リンゴ」「みかん」を歌に合わせて覚える ひらがな(あ・お・え)の導入	
8 2009/9/11	前回までの復習 身体の部位の名称「頭」「肩」「膝」「目」「鼻」「口」⇒「背中」「おなか」「腰」「おしり」「あし」を「ロンドン橋落ちた」に合わせて覚える	
9 2009/9/14	10～20の数字の理解 ひらがなの復習	
10 2009/9/16	ひらがな(ち・つて)の導入と復習 数字	
11 2009/9/18	身体の部位(手・指・爪)の名称。机・椅子などの名称を歌に合わせて覚える ひらがな(か・き・け)の導入と、前回までの復習	
12 2009/9/25	「ある?」「ない?」「どっちにある?」「～を下さい」「ありがとう」文字の復習	
13 2009/9/28	「青」「赤」「白」「黒」「黄色」「ピンク」の名前 ひらがな(ら・り・ろ)の導入	
14 2009/10/2	ひらがな(さ・す・ん)の導入	数字の概念の確認
15 2009/10/5	ひらがな(せ・ぬ・こ)の導入 おとこVSおんな の違いについて	歌で身体の部位名の復習 色の復習
16 2009/10/7	ひらがな(ぬ・の・ね)の導入、おとこVSおんな の確認 子供の進度に合わせた指導	既習の文字を使って体の部位名の復習
17 2009/10/9	ひらがな(る・れ・よ)の導入 既習の文字の穴埋め問題	既習文字でいきもの名前の確認
18 2009/10/14	ひらがな(は・ほ・へ)の導入	既習の言葉(もの)の名称と文字の確認
19 2009/10/16	ひらがな(ひ・ふ・ほ)の導入 「る」「ろ」「は」「ほ」「は」の違いの再確認(復習)・レベル別課題と指導	「ほ」「は」の違いの再確認 はな・はらの同音異義語の確認(復習)
20 2009/10/19	ひらがな(め・み・む)の導入、め、み、む の復習プリント	まる、さんかく、しかく 形のなまえと既習文字の復習
21 2009/10/21	ひらがな(も・や・ゆ・わ)の導入	既習文字の復習(体の部位の名称を使って)
22 2009/10/23	50音のおさらい 撥音の練習プリント 各自に合わせたプリント	既習文字の復習 動物の名前
23 2009/10/26	が行 ざ行 だ行	
24 2009/10/28	は行の高音、半濁音、促音	見ないで50音をか(練習)
25 2009/10/30	あいさつのプリント、色の名前のプリント、あいさつお の確認、見ないで50音を書(練習)	あいさつお の確認
26 2009/11/2	あいさつの言葉 漢字のプリント 50音の確認	もの名前の確認 ホワイトボードだけに見本を示し、プリントに書く練習 50音表
27 2009/11/4	みぎ・ひだり・まんなか / 50音の確認	もの名前の復習を使って文字の確認 / 50音の確認
28 2009/11/6	一文字違いの単語(さるVSさら・かきVSかぎ)など 絵本を読み 右・左の復習	50音の復習
29 2009/11/9	「あ・い・う・え・お」カードを神経衰弱や、かるたのように使って、文字と音の一致を確認	50音の確認(50音表から、知っている言葉の頭文字を探す)色の名前…文字と音の一致
30 2009/11/11	時計の読み方 レベルごとの課題	色の名前を使って文字と音の一致の確認 みぎ・ひだり
31 2009/11/13	みぎ・ひだり・まんなか の確認 レベルに合わせた課題	50音のおさらい みぎ・ひだり の確認 色・物のなまえの復習 50音表等2枚のプリントを宿題とする(全員)
32 2009/11/16	曜日のおさらい 男の子・乗り物のプリント 女の子・チューリップの歌のプリント	50音のおさらい うえ・した の導入
33 2009/11/18	や・ゆの導入 漢字「車」 レベル別の教材プリント 絵本を使って拗音を読む練習	うえ・した・みぎ・ひだりの復習 まんなかの導入 50音表のおさらい
34 2009/11/20	拗音を用いて「大きい」「小さい」の対比⇒反対語 レベルにあわせた課題	50音のおさらい 数字の理解度チェック(穴埋め問題)/みぎ・ひだり・まんなか・ある・ないのおさらい(コップとみかんを使って)
35 2009/11/25	形容詞の反対語(大きい⇔小さい/高い⇔低い/多い⇔少ない…) 数字のおさらい	数字の理解度チェックのためのプリント・50音表の宿題を出す
36 2009/11/27	拗音の確認 20,30… 書く、読む練習 文を読む練習	「きょうは11がつ27にち きんようび」数字の確認・10以上の数の足し算
37 2009/11/30	十・百・千 お金「あたらしいやふるい」「つよいやわい」	「きょうは、11がつ30にち げつようび です。」10以上の数字・10・20・30・40・50
38 2009/12/2	「たって」「すわって」…「おこって」「わらって」「ないて」…などの指示に従う(TPR) 一人一人に、「OO(数字)を持ってきて」と指示しホワイトボードから探させる(選択させる)	「きょうは 12がつ ふたつ すいようび です」10以上の数字の復習(10円玉、1円玉を使って)
39 2009/12/4	「おこって」「ないて」「わらって」「ふつうのかお」など絵カードと文字カードで提示 指示に従う / 「おきて」「ねて」 / 「むすんでひらいて」の歌 / 乗り物のなまえ	「きょうは 12がつ よっか きんようび です」 / 数字の読み方1～12 / 時計の読み方
40 2009/12/7	OO・OOに起きました/食べました 開ける・開める・歌う・踊るをTPRに追加	「きょうは 12がつ なのか げつようび です」時計の復習 拗音の入った単語
41 2009/12/9	「カエルの歌」「むすんで ひらいて」 熱い⇔冷たい ひらがなの復習	「きょうは 12月 ここのか すいようび です」50音復習 拗音の導入
42 2009/12/11	「はる」「なつ」「あき」「ふゆ」 / 天気 / カエルの歌 / TPR	今日の日付の確認 / 文字の練習(ものなまえをつかて)
43 2009/12/14	飛びきもの・鳴いきものを選ぶ「OO君は飛ぶ?」「××は鳴く?」などの質問に答える⇒「飛ぶ」「泳ぐ」で可能の表現を理解する。動物の絵カードを提示し、「大きいですか?」「小さいですか?」「おおきくないですか?」「ちいさいです」を理解する。	日付の確認 / 「立って」「座って」「来て」「書いて」など
44 2009/12/16	いろいろな着脱の表現の違い(帽子・かぶる / めがね・かける / 上着・着る…) 形容詞の反対語(明るい⇔暗い / うるさい⇔静か…)	日付の確認 / 立つ・座る・歩く・走る・止まる・寝る・起きる…TPR / 時計の復習
45 2009/12/18	形容詞の反対語 / 動物の鳴き声 / 季節・天気・曜日などのおさらい	日付の確認 / 書く練習 / TPR 笑って・怒って・泣いて
46 2010/1/8	復習 カタカナのレベルチェック(「あ」～「た」行)	ひらがなの復習(色の名前を使って)
47 2010/1/13	カタカナ「な」行と「は」行 漢字「入る」「出る」「立つ」	日付の確認・数字の復習・寒い⇔暑い TPR
48 2010/1/15	ひらがな・カタカナの復習終了 「切る・着る」「描く・書く」「吹く・拭く」	今日の日付・ひらがなの復習(顔のパーツを使って)・寒い・冷たい(保冷剤を触らせて「冷たい」と言う)
49 2010/1/18	カタカナとひらがなの対応/カード選び 漢字	日付の確認 動物の名前と鳴き声 カワン君のメガネ「青」から、子ども達や自分の持ち物や、服を使って色の復習 +宿題
50 2010/1/20	「行きます」「帰ります」「行ったことがあります」(学校・遊園地・動物園・駅・寺・銭湯など) 漢字	日付の確認 ひらがなの復習(体の部位を使って) 歌います・踊ります 絵本「かえるくん」
51 2010/1/22	自己紹介シート(生年月日・すんでいるところ…) 日本地図・世界地図(ブラジル・日本はどこ? 静岡は? 浜松は?)	日付の確認 大きい⇔小さい(どっちが大きい?どっちが小さい?) それぞれの手の大きさを比べてみる) 絵本「はらこ あおむし」
52 2010/1/25	ひらがな・カタカナの対応 / 漢字の復習	日付の確認 時計の復習
53 2010/1/27	漢字「年」「月」「日」「名」「学」「校」の練習	日付の確認 色の名前+形の名前(復習)一例「きいろい まる」
54 2010/1/29	漢字 助詞を選ぶ問題	日付の確認 上・下の復習(物の名前の復習もかねて) 拗音の単語の復習 大きい⇔小さい/長い⇔短い

## 【調査 基礎情報（生活環境、学習意欲等）】

### 1. 調査目的

コミュニティキッズに参加した不就学に陥っている外国人児童の生活環境や学習意欲等を明らかにする。

### 2. 調査方法

(1) 実施時期：2010年1月下旬

(2) 調査方法：個々の児童にインタビューを実施（一人あたりの所要時間：5分）

(3) 調査者：二井紀美子、緩利誠

### 3. 調査結果

#### 1. 出生地

	ブラジル	日本	計
度数	9	9	18
%	50.0	50.0	100

※1:ブラジル生れの全員が4歳未満に来日

※2:日本生れのうち、8名(88.9%)が来伯経験なし

#### 2. 就学希望

	すぐにでも行きたい	行ければ行ってみたい	行きたくない	計
度数	14	2	2	18
%	77.8	11.1	11.1	100

#### 3-1. 学習意欲(ポルトガル語)

	とてもある	ある	どちらともいえない	ない	計
度数	1	11	5	1	18
%	5.6	61.1	27.8	5.6	100

#### 3-2. 学習意欲(算数)

	とてもある	ある	どちらともいえない	ない	計
度数	4	13	1	0	18
%	22.2	72.2	5.6	0.0	100

#### 3-3. 学習意欲(日本語)

	とてもある	ある	どちらともいえない	ない	計
度数	5	9	4	0	18
%	27.8	50.0	22.2	0.0	100

#### 4. 家庭内での使用言語

	両方	ポルトガル語	日本語	計
度数	1	17	0	18
%	5.6	94.4	0.0	100

#### 5. 視聴するテレビ番組

	両方	ポルトガル語	日本語	計
度数	2	5	11	18
%	11.1	27.8	61.1	100

#### 6. 日本人の友人

	いる	いない	計
度数	10	8	18
%	55.6	44.4	100

※「いる」内の最小が1人、最大が10名以上

#### 7. 日本人の友人と遊ぶ頻度

	よく遊ぶ	たまに遊ぶ	遊ばない	計
度数	3	7	8	18
%	16.7	38.9	44.4	100

※「遊ばない」のうち、1名が「親が日本人と遊ぶのを許してくれない」との発言あり

## 【調査 語彙力（日本語、ポルトガル語）】

### 1．調査目的

コミュニティキッズに参加した不就学に陥っている外国人児童の語彙力を明らかにする。

### 2．調査方法

(1) 実施時期：2010年1月下旬

(2) 調査方法：(愛知県プレスクール実施マニュアル検討会議，2009，pp.84-85 から一部を表記変更の上、抜粋)

使用物：語彙調査カード、語彙調査チェックシート、筆記用具、机といす

語彙調査の方法：

- ・ 静かな落ち着いた環境で、子ども一人に対し質問者と記録者の2名で実施。
- ・ 子どもに、質問者が語彙調査のカードを1枚ずつ提示して、絵の名前を聞く。子どもが答えられない時は、聞き直したり、質問の表現を替えたりせずに、次の質問に移る。
- ・ 記録者は、子どもの視界に入らない位置で、記録を行う。
- ・ 母語調査と日本語調査は、同時には行わない。
- ・ 子ども一人あたり、15～20分程度の時間を要する。

備考

- ・ 語彙調査の語彙は、「小学校一年生の生活レベルに必要な語彙」の中から「日本語と母語の両言語からの調査を想定し、できるだけ文化的な影響の少ない語彙」を選定。ただし、母国では全く見聞きしたことのないものが語彙調査に含まれていることもある。
- ・ 語彙調査で提示する語彙が全て分かって、小学校の教科学習で使われる語彙や複雑な文型が分かるということではない。ただし、語彙調査の結果（日本語）が80%以上なければ、日本の小学校（1年生段階）で使われる指示等の理解にも困難が生じると経験的に言われている（2010年1月25日実施のプレスクール担当者への聞き取り調査より）。
- ・ 語彙が答えられるかどうかを基本的には調査するが、質問の意味が分かるかどうかもチェックポイントとする。

(3) 調査者：二井紀美子、緩利誠

### 4．調査結果

#### ○日本語

子ども	性別	年齢	正答率
A	男	5	18.0%
B	女	6	35.0%
C	男	6	19.0%
D	男	6	27.0%
E	男	6	18.0%
F	男	6	13.0%
G	女	6	26.0%
H	女	6	13.0%
I	女	7	65.0%
J	女	7	24.0%
K	男	7	23.0%
L	男	7	46.0%
M	男	8	79.0%
N	女	8	30.0%
O	女	8	19.0%
P	男	8	33.0%
Q	男	9	25.0%
R	男	10	76.0%

#### ○ポルトガル語

子ども	性別	年齢	正答率
A	男	5	76.0%
B	女	6	82.0%
C	男	6	88.0%
D	男	6	86.0%
E	男	6	92.0%
F	男	6	86.0%
G	女	6	84.0%
H	女	6	89.0%
I	女	7	94.0%
J	女	7	91.0%
K	男	7	86.0%
L	男	7	92.0%
M	男	8	85.0%
N	女	8	94.0%
O	女	8	94.0%
P	男	8	94.0%
Q	男	9	85.0%
R	男	10	87.0%

## 5. 考察

コミュニティキッズに参加していた不就学の子ども達は、家庭内で日本語のテレビ番組を視聴しているものの、基本的な家庭内での使用言語はポルトガル語であり、日本語・日本文化への接触機会は少ない傾向にある。語彙調査の結果でも、日本語の習得率は低く、日本語のテレビ番組を視聴していても理解していないことが窺える。また、小学校に在籍できる学齢に達している子どもの中には、ポルトガル語の習得率も低い子どもが数名おり（例えば、子ども K,M,Q,R）いずれの言語習得にも課題が見受けられるケースがあった。ただし、就学意欲や学習意欲はあり、適切な教育環境が提供されれば、それらの課題は解決可能であると期待される。

一方で、年齢に関係なく、全ての子ども達が、日本の小学校（1年生段階）で使われる指示等が理解できるという学校現場における経験的な目安の80%には到達していない。仮に日本の小学校に入学したとしても、何らかの特別な教育支援体制が適切に整備されていなければ、言語習得の未熟さゆえに、学力問題が引き起こされる危険性が予知できる。

## 参考文献

- ・ 愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室（2009）『プレスクール実施マニュアル』（マニュアル使用に関しては申請済み）